

---

# 傷詠み 黒い季節から二年後

しゃヴえ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

傷詠み 黒い季節から二年後

### 【Nコード】

N0654P

### 【作者名】

しゃヴえ

### 【あらすじ】

傷詠みという男がいる。

全世界で発生した原因不明の病の流行により、多くの人は記憶欠落者となった。

それから二年後。

記憶欠落者を唯一治療できる傷詠みという名の男がいた。

病院を転々とし、そしてまた新たな病院へと入る。

そこにはチカコという名の記憶欠落者患者が眠っていた……

## (前書き)

二年ほど前に書いた物語です。

幼稚で安直な設定とかあったりして恥ずかしくなりますが……

では、「傷詠み 黒い季節から二年後」をお楽しみください……

黒い季節から二年後

プロローグ 傷を詠む者

深夜の小さな病院、ミカミザカ病院の前で一人の長身でモノクロボーダーラインのロングジャケットを着た真紅の髪を持つ男が立ち止まる。

その男の顔は長い真っ赤な髪によって見る事が出来ない。

男は目の前にある病院を前に数分立ち止まると、『チカコ』と呟き病院内に入っていた。

深夜の病院の廊下は長く暗い。ただ暗いわけではなく、いやに深い黒で塗りつぶされていた。

負の力。

とても言おうか。

人が死ぬ場所。人が痛みを訴える場所。人が病に倒れる場所・・。

鈍く光るタイルの床に染み込むように闇が広がっている。

男はその暗い廊下を歩いて救急外来の受付に向かった。

「…どうされました？」

受付の女性が言った。男の容姿を見て少しおびえているようだった。それもそうだ。男の格好は狂っていると言いたいようがない。

「……………」

男が一言、聞き取れないほど小さな声でそう言った。

「すみません。よく聞き取れないのですが……」

やはり受け付けの女性は聞き取ることが出来なかったようだ。

「傷詠みだ」

「え？」

受付の女性は聞き返すように言った。聞き取れなかったわけではない。何故ならその言葉『傷詠み』は医療に携わる人間なら、それもこの時代に生きる人間ならば一度は聞いたことのある言葉。

「：傷詠みってあの傷詠みですか？」

「そうだ・・・」

受付の者の眼がおびえから驚きに変わった。

「すぐに先生達をお呼びするので少し待っていてください」

そう言う受付の者は設置されている内線電話でどこかに連絡を取った。

十数分後、今この深夜のミカミザカ病院にいる全ての医師が集まってきた。それを見た傷詠みと名乗る男は言った。

「記憶欠落者を治療する代わりに数週間ここで寝泊りさせてくれ」

医師たちはどよめく。本当に傷詠みが存在していることに。

「傷詠みは赤い眼をしていると聞く。証拠を見せてほしい」

医師の一人が言った。傷詠みと名乗った男はそう言われ、髪をかきあげて医師たちに自らの瞳を見せた。真紅の瞳だった。医師たちが再びどよめく。声をそろえて医師達は本物だと呟く。

「そういう訳だ。早速で悪いのだがベットを一つ用意してもらえるかな？」

真紅の髪と瞳を持つ男は眠たそうに言った。あと…、そう男は付け加えて再び話し始めた。

「この病院にチカコという名の女の子がいるはずだ。始めにその子をまず見たい」

医師の一人が何故？と訊く。傷詠みは自嘲的に笑う。クククと。「理由は話さなくてもいいだろう？ベットの用意をしとけ。さあ、チカコに会わせてくれ」

医師の一人に連れられて奇妙な男は病院の廊下を進んだ。階段を上がってすぐのところに「チカコ」の病室があった。男は一言「チカコ」と呟いて中に入っていた。病室に入るとベットに一人の少

女が横になっていた。点滴を打っている。

「やっと帰ってきたよ。チカコ。もう大丈夫だ」

男の頬には一筋の涙が流れていた。

## (1) 闇の淵から回復

朝。気がついた時には私は起きていた。今まで長い夢を見ていたような感じだった。それを無理やり起こされた感じがした。

でもいつから私は眠っていたのだろうか？昨日の夜に眠ったのか？それにしては体が重く感じる。自分の身体なのにうまく動かない。ごわごわしている。それに手が震える。

自分はどうなってしまったのだろうか？いつから眠っていた？

ここはどこ？知らないふかふかのベット。気が狂ってしまうぐらい真っ白な壁の部屋。ここはどこだ？

そんなことを考えていたら私のいる部屋に一人の燃えるような赤い髪で長身の男が入ってきた。

赤い髪が白衣によって映えていた。白衣のしたは白黒のボーダーラインのTシャツを着ていた。顔は長髪で隠れている。きっと自分の顔が嫌いなんだろう。もしくはあまりに不細工なので人に見られたくないからだろうか。

男は私を見て独り言を呟いている。何か納得しているようだ。赤い髪の男が私の前に来た。そして異常なぐらい近い距離に顔を近づけてきた。私は怖くなって顔をそむけたが赤い髪の男は私の頭を掴んで固定した。

「俺の眼を見て」

そう言われ、私は恐る恐る赤い髪の隙間からのぞく瞳を見た。その瞳は真っ赤な色だった。瞬間まるで宙に浮かぶような感覚がした。身体にまとわりついた倦怠感が飛んで行くようだった。

「…やはり不完全だ」

赤い髪を持つ男はそう言う。そうすると私をみつめる赤い瞳がさらに赤みを増す。ふわふわした状態が続き、何かが徐々に戻ってくるような感じがした。浮かん言葉は。何だろう？

「自分の名前はわかるかい？言ってみてごらん」

「……チカコ」

私は私の名前を言った。

「貴方は誰？」

「俺の名前は傷詠み」

「変な名前」

よくわからないが傷詠みと名乗る初対面の人に私は毒づいた。傷詠みはそれを気にすることなく説明を始めた。

「君は二年前の黒い季節によって重度の記憶欠落者になった。記憶欠落とは記憶が欠落して最終的に一生眠りについてしまう病気のこと。それで今君は病院に入院している」

黒い季節とは何だろう。日本には春夏秋冬の四つの季節、四季があったような気がする。

「黒い季節って何ですか？私知らないです」

傷詠みはゆっくりと天井を仰いだ。天井にでも書いてあるのか？私は傷詠みの視線の先を見してみる。当たり前だが何も書いてはいない。

「黒い季節。それは二年前に起きた世界規模の怪奇現象。最初は皆、昼間夜かと思った」

昼間夜。それは何だ？傷詠みさんに訊こう。

「訊くまでもない。昼間夜は約十五年前から起きるようになった変な現象だ。昼間夜は昼間にもかかわらず、空が真っ黒になって夜みたいになる現象だ。昼間夜になると交通事故が多発する。まあこれはどうでもいいか」

まるで心を読んだかのような発言。気持ちわるいな。ククク、と自嘲気味に笑う傷詠み。

「黒い季節のことだが、ある日、いつものように昼間夜が始まった。

しかしその日は違っていた。雨が降り始めたのだ。それも黒い雨が。黒い雨の正体は未だに不明。その名の通り黒い雨としか言いようがない物だ」

「それがいったい記憶欠落者とどう関係しているんですか？」

天井から私の方に顔を向けた傷読み。

「黒い雨を目撃した人類の七十パーセント以上が記憶欠落者となった」

え？そんなことで？何故？

「俺には何故かはわからない。私は記憶欠落者を治癒するだけの存在だからな」

「その黒い雨を見たから私は記憶欠落者になったのですか？」

「たぶんな。正式には黒い雨を見たからではないかもしれない。黒い雨の害毒が記憶関係を消してしまう作用があったのかもしれない。いずれも真相は闇の中だ。さて、とりあえず君が何故ここに入院しているのかの説明はこれでいいかな？君にはもっと質問があるはずだ。今は黒い季節の話はおいておこう」

じゃあ……。

「私は今何歳なんですか？」

私は疑問をぶつけていく。

「十六歳。だから十四歳の時に記憶欠落者になったことになる」

「お父さんとお母さんはどこにいるんですか？」

「君の両親は君と同じく記憶欠落者になった。兄もいたな。残念ながらもうこの世にいない」

「そうですか」

両親や兄のことを私は考えたが顔も性格もわからない。よくわからないが悲しくはなかった。

「わからないことがあったら私に言ってくれ。できることなら協力してあげれるから」

そう言って傷読みは病室を出て行った。その時、赤い髪が風になびいた。そして見てしまった。赤い眼の男、傷読みは何故か泣いて



いたことを。

(2) 黒歴史。十五年前の悪夢の推測。

「チカコ。届いたぞ」

傷詠みが大きな緑色赤色なサイケ色の箱を抱えて私の病室に入ってきた。待ってました。私はインターネットに繋いで広大なネットの海にダイブしてみたかったのだ。でも、ちょっと不安……。その箱、なんかパソコンの入っている箱っぽくない……。

「本当にそれ、パソコン？」

傷詠みは箱を机の上に置くと早速中身を取り出し始めた。私の質問には一切答えない。箱から出てきたのはまたまたサイケ色な変なテレビだった。

傷詠みは変なテレビの電源ケーブルをコンセントに繋いだ。傷詠みは繋いだ後、動け！と叫んだ。当たり前だが動きはしない。

「ねえ、それパソコンなの？」

「俺は機械音痴だからよくわからん。ショップの店員に俺でもわかるパソコンくれて言ったらこれになった。一応パソコンなはずだ。そう、パソコンだよこれは。そういえば店員がキーボードって奴とマウスが別途で必要って言ってたからとりあえず買ってきた。ちょっと待ってろ。持ってくる」

そう言って傷詠みはいったん病室を出て行った。

そして数分後、廊下で傷詠みと看護師さんの激しい言葉の応酬が聞こえてきた。どうやら何か問題が発生したようだ。パソコンのどこか？私は病室から廊下に出た。傷詠みと看護師さんが大きな声でやはり討論していた。

「何故駄目なんだ！パソコンにキーボードとマウスは必要なんだ！チカコはパソコンで色々調べ物するんだ！邪魔する気か貴様！」

「だからそれはパソコンに関係ないでしょ！パソコンをやるのはかまいません。記憶欠落者患者の治療には精密な機材は必要ないです

から。電磁波による影響もまったく与えることはないです。でもそれはパソコンに使いません！天変地異が起きても使いません！」  
傷詠みはいったい何を買って来たんだ？

「ショップでキーボードとマウスは別途で必要って確かに俺は聞いたぞ？ショップの店員が間違っているのか？少なくとも貴様よりプロが言ったんだぞ！それでも駄目だということのか！」

看護師さんがあきれている。私はとりあえず傷詠みがどんなキーボードとマウスを買って来たのか見たかった。というか何故そこまで傷詠みは怒る？

「傷詠み。買って来た物見せてよ」

傷詠みは「いいだろう」と言っても大きくてちょっと重い長方形の箱と小さな可愛い箱を私に渡した。私は開けていいと訊くというぞと傷詠みが言った。まずは大きな長方形の箱を開けてみた。

「うん。これはキーボードだよ。インターネットでは使わないけど」  
傷詠みは「えっ」と聞き返した。これパソコンで使わないの？と。

「うん。これはキーボードでも楽器のキーボード」

傷詠みはそうかと呟き、その少しした後顔を上げてマウスは使わずだと叫んだ。私は小さな可愛い箱を開けてみる。

「……これマウスだよ。確かに……」

私はなんかめまいがした感じがした。傷詠みがいくら機械音痴でもさすがにこのマウスを買ってくるとは思わなかった。というか機械音痴以前の問題だ。

「これはさすがに……」

どうだどうだと満足げに傷詠みははしゃいでいる。

「かわいいね……でもこれはパソコンには使えないよ」

傷詠みは再び「えっ」と聞き返した。

「マウスはマウスでもこれはねずみだよ」

「これじゃないの？」

「これじゃない」

「かわいいのに？」

「かわいいけど違うね」

「俺ちよつともう一度買ってくる…」

病院を出て行こうとした傷詠みを看護師さんが止めた。このまま行かせたらどんなマウスが来るかわかったものじゃない。看護師さんが休憩時間中に買ってきてあげるといふことで話はまとまった。だが、問題がひとつ残る。このねずみをどうするかだ。

「サイトウさん。このねずみどうするんですか？」

看護師さんは困っていた。確かにこのねずみをどうするかに悩む。衛生上、病院で動物を飼うのはまずい。でも、ねずみは物じゃない。生きていてちゃんとした生命体だ。傷詠みが看護師さんに飼うのはまずいのかと訊いた。

「病院で動物を飼うのはまずいわね。ペットショップに返すしかないと思うわ」

「：わかった。俺が返してくる」

傷詠みはねずみの入っている箱の蓋を丁寧に閉めた。そして病院を出て行った。看護師さんはいくら傷詠みさんの頼みでも病院内で動物を飼うことはできないわ。と言った。そして持場に戻っていった。

それから長い時間が経った。もう三時のおやつの時間だ。まあこの病院ではおやつは出ないが。

傷詠みはまだ帰ってこない。看護師さんがマウスとキーボードを買ってきたので私はサイケ色の変なテレビを調べてみた。看護師さんも手伝ってくれたので、キーボードとマウス（ちゃんとした物だよもちろん）を繋ぐことができた。

そしてサイケテレビ風パソコンの説明書を読んで電源を入れるスイッチも発見。押してみる。

パソコン内部のファンが回る。うるさくもないし、静かでもない。そんな音。画面がぱっと明るくなる。画面に英語で文字が表示される。だが私には読めなかった。そのまま待ってみると色々設定する

らしき画面になった。

初期設定っていう物か？慣れないキーボード入力に悪戦苦闘しているとき、看護士さんがまた来てくれた。凄い速度で入力していく。あつという間に入力終了してしまい、インターネット環境もちゃんと整備した。そして基本的な使い方がある程度私に教えて去っていった。さりげなく看護士さんのサイトウさんは凄い。

パソコンの設定を終えた。インターネットにも繋いだ。後は調べたいことを調べるだけだ。検索サイトで「黒い季節」と入力して、検索ボタンを押す。ババツと黒い季節に関する情報が出てきた。その中からどれにしようかを見ていくと、「黒い季節とは？十五年前の記憶」といった名前のサイトが見つかった。興味をそえられる。私は入ってみる。シンプルなサイトでただ文章が並んでいただけだった。私はそれを読んでいく。

### 黒い季節とは？十五年前の記憶。

黒い季節の情報を私なりにまとめてみた。正確ではないと思うが黒い季節のことを知ってもらうには丁度いい機会だと私は思っている。

文章に矛盾が生じている所もあるがそれは私がこの情報をノートに殴り書きしているような物であるからである。その点をご理解願いたい。

まずは黒い季節と呼ばれている物のことについて。

黒い季節とはいつものように昼間夜（後で説明する）から始まってその後黒い雨（後で説明する）が降った現象の総称である。なので、昼間夜一つだけ、黒い雨一つだけでも一応黒い季節と呼ばれることがある。

人によって様々な名称で呼ばれている。黒い雨を見た者、触れた者は記憶が欠けてしまい、記憶欠落者（後で説明する）となってしまう。

昼間夜について。

昼間夜とは昼間にも関わらず夜のように空が真っ暗になってしまう現象。この現象が起きる理由となる一つの仮説がある。それは黒歴史と関係がある。黒歴史とは：いや。後で説明しよう。

昼間夜の現象の一つの仮説についてだが、無力化兵器の起動テストの際に起きる現象ということと考えられている。その無力化兵器というのは全世界人類の記憶を欠落させ無力化するという物である。そんな物を作ったのは誰だと言う話だが黒歴史と関係がしてくるので今は説明しない。黒歴史の説明の時に記しておく。

黒い雨について。

黒い雨とはその名の通り黒い雨である。

それを見た者、触れた者は記憶欠落者となってしまう。

人類以外の動物にも黒い雨の影響が生じた。飛ぶことを忘れた鳥や、泳ぐことを忘れた魚。狩りをするという行為を忘れた肉食獣などだ。生態系にも影響を与えたらしい。

黒い雨の何のせいで記憶欠落が生じるかは判明していない。これは昼間夜でも記したが無力化兵器の起こした現象だと推測される。昼間夜が無力化兵器起動テストならば黒い雨は発動されたということになる。何故無力化兵器が使われたかの理由はわかっていない。これも黒歴史で説明する。

記憶欠落者について。

記憶欠落者とは黒い季節によって記憶の欠落が生じた者を指す。

記憶欠落者は自分の持っている過去の記憶を虫食いされた状態になる。いきなりそれを言われてもわからないと思うので、簡単に説明する。

一冊の記憶という名の本があったとしよう。その本のページが途中で大量に破り捨てられている。それも何箇所も。それが記憶欠落という状態だ。わかり難いかもしれないがこれが一番簡単な説明だと思う。だから過去を思い出したいと思っててもその過去すらないので何も感じないし、そもそも思い出そうとも思わないのだ。

実際私も記憶欠落者だったのでよくわかる。

記憶欠落者は過去の記憶を失ったことから深い眠りにつく。それは生きるという根本的な理由となる記憶を失ったためなのかもしれない。

記憶欠落者は生きてはいるが、死んでいる。死んでいるが、生きている。そんな状態だ。それは生きる理由という過去を失っているからである。

記憶喪失とはまた違ったものである。私の推測でしかないが、記憶喪失者になったものは自分の過去を取り戻す機会があるし、また取り戻したいという願望もある。まあ思い出してから思い出したことに後悔する者もいるようだが。

その点記憶欠落者になった者は記憶を絶対に取り戻す機会は与えられない。精神的な理由、肉体的な理由とは別の何かが作用して思いつくことも思わない。

実際私がそうだった。

ちなみに何故私が記憶欠落から脱出できたかというと、日本の医学世界で都市伝説となっている「傷詠み」と呼ばれる人物に助けられたからだ。

傷詠みは記憶欠落者に人間が本来持つ基本的な記憶を植えつけることが出来る。例えば生きる理由などをだ。

その記憶はもちろん偽物の記憶だが、それを与えられることで記憶欠落による深い眠りから脱出できる可能性が与えられる。

傷詠みは都市伝説としてこんな感じで知られている。面白いので記しておく。

傷詠みは赤い眼と赤い髪を持った長身の男で服の趣味が悪い。突然現れて「記憶欠落者を治す代わりに数週間ここに泊まらせてくれ」というらしい。

そして記憶欠落者を治すと消えるという。私は二、三度しか会ったことがない。確かに真っ赤な髪と真っ赤な眼をしていた。

何故傷詠みは記憶欠落者を治せるのかは不明。傷詠みに訊ねたと

ころ教えてはくれなかった。

もう一度会ってありがとうと言いたい。

全世界人類七十パーセント近くが記憶欠落者になっている。傷詠み一人で全ての記憶欠落者を治癒することは根本的に不可能。一日に七十人治癒させたとしても十八万年近く掛かることになる。

黒歴史について。

とうとうこれを説明する時が来た。

黒歴史。これには様々な説があるが、もっとも有名で、知られていない説を記そうと思う。

約十五年前から昼間夜が起きるようになった。そしてその五年前。科学技術の進歩によって人造人間「ゴーレム」が創造された。それは神の領域でもある人類による生命の創造だった。

簡単に言えばそれが黒歴史の始まりである。

人造人間たちはその名の通り人によって造られた人工の人間のことだ。別名ゴーレム。世界中で生み出され、人間達の奴隷として働いていたらしい。

もちろんゴーレムたちにとっては苦痛以外のなにものでもなかったが、逆らうと生命活動を維持するための「クスリ」が供給されなくなり死んでしまうため逆らえずにいた。

だが、ある日、革命の一步となる事件が生まれた。後にゴーレム界で英雄となる魔眼シリーズと呼ばれるゴーレムたちによって「クスリ」の呪縛から逃れる方法が生まれたのだ。

それによってゴーレム達は革命運動を開始。人間をはるかに超えた身体能力を使い、圧倒的な力で人間達を殺戮した。

黒歴史が始まってから三年後、ゴーレムたちはひとつの楽園を築いた。そしてもし楽園に危害を加えるようならゴーレムたちは徹底的に排除すると宣言した。それが約15年前ぐらい。昼間夜という現象が起き始めた頃と近い。

真昼夜はゴーレム達が人類に対して切り札としていた兵器の起動テストをした時に起きる現象なのでは？と考えられている。

そして二年前に黒い季節が起きた。ゴーレムの代表者はまったく知らないし、私たちは何もしていないと神に誓った。しかし人間達はゴーレムからの総攻撃と認識して楽園にケミカルバーと呼ばれる対ゴーレム用空爆を展開、ゴーレムたちを滅亡させた。

ケミカルバーとは肉体を溶かしてしまう霧のようなもので、生きたままスライム状にしてしまうものだ。

黒歴史を知っている者は黒い季節とは人間に対しての復讐を意味する行動だったのかもしれないと考えている。

だが、その復讐に何の意味があったのか？それが問題だ。その問題が解決されるまで哀しい運命を背負って生まれてきたゴーレムたちは安らかに眠れないのかもしれない。そしてその理由は誰も知らない。この話は傷詠みから訊いた話なので真相はわからない。傷詠みはいったい何者なのか？何故ゴーレムたちの話を知っているのか？

私は「黒い季節とは？ 十五年前の記憶」を読み終えた。

正直あいた口がふさがらない。傷詠みがまさか知らないところで語られるとは思わなかったからだ。そして、ゴーレムと呼ばれる人たちの戦いの記憶と悲劇とも言える誕生の話。

そして終幕を知って何か胸を熱くさせるものがあった。ゴーレムたちのことを私は知りたい。もっと知りたい。

「チカコ。食事の時間だ」

振り返ると傷詠みが壁にもたれて立っていた。いつからいたのか？私がこれを見ていたことを知っているのか？

「どうした？食事の時間だぞ？早く行かないと俺が食べてしまうぞ？」

クククと自嘲的な笑い。

「いつからいたの？」

「ほんの二、三分前ぐらいからだ。チカコはパソコンに夢中になっていたから気づかなかったのだろう」

「そう…」



「マウスだが、看護師のサイトウさんが飼ってくれることになった。俺がペットショップに返しに行ったら店が断ったって話だ。そもそもペットを飼うつもりではなかったが生き物を買ったのだ。その責任を取ろうと思って俺が飼うと言ったのだが、生憎俺には家がない。それでサイトウさんが飼ってくれるって話だ」

よかった。ねずみは大丈夫そうだ。

チカコはパソコンの電源を切って病室を出ようとした。傷詠みとすれ違う。ふと傷詠みを見る。髪の間から表情が見えた。とても辛そうで泣きそうな顔をしていた。

### (3) 異常な力

重度の記憶欠落から生還してから早一ヶ月が経った。

私はリハビリのために傷詠みと一緒に街に行くようになった。もともとは傷詠みが一人で本来の目的である人探しをしていたのだが、私が内緒で隠れるようにして行ったことに傷詠みが気づいて街は危ないので私を隣に歩かせるようになったのである。

服も病院で着てるものではなく、傷詠みが外用の服を買って着せてくれた。白と黒のボーダーラインのロングTシャツとデニムのパンツ。それを着ている私の隣には同じく白と黒のボーダーラインのロングジャケットを着ている傷詠み。周囲から見れば兄妹に見られるだろう。傷詠みはまだ23歳（噂だとだが）らしいから。

と私は思った。もしくは恋人か。それは嫌だ。というかペアルックは恋人同士の証なのだろうから恋人同士に見られるのはしょうがないと思う。嫌だなあ。

だが、そんな考えを頭の中でぐるぐる思考していると少しうれしくなる。嫌とか考えていると私が存在しているという実感が沸く。何故だかはわからないが。

夜の街を歩いているいつも思うが視覚的な情報が飛び交っている。ライトアップされた看板。巨大なテレビに映し出されているア

アイドル。様々なお店がある商店街。

「ねえ傷読み。いったい誰を探しているの？」

「私を傷読みにした者」

傷読みはこちらに顔を向けずに言った。

「なにそれ？ 師匠みたいなもの？」

「いや、やめよう。この話は」

私はいつも何も自分のことを話してくれない傷読みに嫌になる。

でもいい意味の嫌。嫌いじゃないよ。そういうの。

「厄介なことになったな……」

「何が？」

「全員で七人。走れるか？」

「だから何のこと？」

「妙な連中に囲まれている」

「え？」

周りを見してみる。全員スキンヘッドの怖そうな人たちが歩きながら私たちを囲んでいた。そして唐突にスキンヘッドの一人が話しかけてきた。

「そのまま歩け。逃げたら殺す」

私は怖くなった。このまま歩いていたらどうなってしまうのだろうか？ 怖い。スキンヘッドの男達が手にしている物をチラッと見ってしまった。

ナイフを持っている者もいれば拳銃を持っている者もいた。この人たち、何者なの？

裏路地に入り、大通りからかけ離れた場所に着いた。今から走って逃げてもどこに逃げればいいのかわからない。

男たちがさらに増えた。全員で九人。全員がスキンヘッド。

「女を渡すのなら命だけは奪わないでやる」

リーダー格と思われる一人のスキンヘッドが言った。私はどうしていいのかわからなかった。もし傷読みが私をスキンヘッドの男達に渡したらどうなるのか？ いったい何をされるのか？ 足が震えてる。

それに対し傷読みは冷静だった。むしろ挑発していた。

「その逆だ。三人生贄を捧げるのなら残りの命は助けてやる」

スキンヘッドの男達が哑然とする。その数秒後笑いが裏路地に響いた。笑いがおさまる。

「何ふざけたことぬかしてんだ？お前一人で何ができるんだ？あ？」  
手に持つナイフをぺちぺち手のひらで叩きながら一人のスキンヘッドが言ってきた。

「まずはふざけたことぬかしてるお前からだ」

傷読みはそう言うのと、ナイフスキンヘッド（仮に名前をつけさせてもらった）の顔を片手でつかんだ。

持ち上げた。それを見た周スキンヘッド達が全員表情を凍らせた。だれもかれもがぼかんと口をあけたまま固まっていた。

「まずは一人目。人生再起不能にさせてやる」

傷読みが宣言した後、ナイフスキンヘッドが痙攣し始めた。そして。ナイフを落とし、ナイフスキンヘッドが地面に崩れるようにして倒れる。ナイフスキンヘッドは何か低いうなり声を上げながら倒れたままだった。

「てめえ、何やりやがった。ぶっ殺してやる…！」

そう言ったスキンヘッドの方へと傷読みが顔を向ける。そのスキンヘッドも変な踊りを踊っているかのごとく痙攣を始めた。そして倒れる。

「チカコ。伏せろ」

傷読みが手で私の頭を上からものすごい力で押さえた。私はしゃがむように倒れた。瞬間轟音が鳴り響く。一回。二回。三回。その爆音はスキンヘッド達の持っていた拳銃から発せられていた。三発撃たれたのは言うまでもなく傷読みだった。

スキンヘッド達は裏路地に消えていった。

「き、傷読み……」

私は足が震えて立てなかった。思いのほか拳銃の発砲音がきいてるようだった。笑っている足を何とか両手で支えて無理やり私は立

った。そして傷読みのもとへと向かう。

「傷読み：大丈夫：なの？」

「生贄は三人のはずだったのに。まったく：イテェ：」  
痛いという言葉聞いて私は我に返った。

「傷読み：！携帯はどこなの：！早く病院に電話しないと！」

クククと自嘲気味に傷読みが笑った。何がおかしいのよ！

「携帯なんて持ったことがない。安心しろ。痛い死にはしない。

さあ、帰ろうか」

傷読みはぎゅっと私を抱いた。傷読みの真っ赤な血で私の白黒Tシャツに真っ赤な色が血がついてぐしゃぐしゃになった。

「：傷読み。何でそんなに強いのか？」

傷読みはまた自嘲気味に笑った。でも、その問いに答えてくれなかった。ふとこの人の顔を覗いてみたくなった。下からなら見えるはず。

え？なんで？

傷読みは笑っていた。でも、赤い眼からは大粒の涙が流れていた。

(4) 言葉でお遊び。

傷読みは怪我の治療中。拳銃で三発も撃たれたのに死ななかった  
傷読みは人ではない気がする。

三発の弾は一発は肩を貫通。残りの二発は腹部から摘出された。

外科の先生からあまり動いてはいけませんと言われ、傷読みは病  
院内をうろうろする毎が続いている。

たまに私の病室でパソコンの練習をするが、まったくといって  
いほど上達しない。私でもタイプ入力が早くできるようになったの  
に。傷読みは本当に機械音痴なのだなと思った。私はパソコンに悪  
戦苦闘する傷読みを置いて病室から出た。

廊下を歩いて階段を下り、外庭に出る。もう寒い。季節は秋とい  
ったところだろう。

歩いていると真っ赤な長い髪を持つ変な白い色の身体のラインが見えるタイトな服を上下着た人が病院に入っていくところを見た。真っ赤な燃えるような髪だった。

ふと傷詠みのことを思い出す。真っ赤な髪。センスの悪い格好。共通点はある。私は気になってその人の後をつけていった。

病院内に入るとさっきの人が受付の人と喋っている。私は話を盗み聞きしようとして近づいた。そしてその人の服装に驚いた。

一言で言うならば「イヤラシイ格好」だった。白い上下の服は皮製でさらに黒い皮のベルトみたいなもので全身をきつく拘束具のように締めている。なんてイヤラシイ。

身体のシルエットがはっきりわかるので女の私でも目のやり場に困る。

「私はキジュヨミをサギヤしてしましゅ。ここにキジュヨミがいると聞いて私は会いに来ました。私の名前を言ってもりゃえればわキヤるはずレしゅ」

変な喋り方だ。聞き取り難い。どこか溶けてしまいそうな声。そして滑らかな声だった。

「キジュヨミ：ですか？ああ、傷詠みさんのことですね。ちょっとお待ちください。あ、お姉さんのお名前はなんですか？」

「コトビヤ遊びレしゅ」

受付の人が看護師さん呼び出した。そして傷詠みさん呼んで来てと言いつづけた。

数分後、のろのろ歩いて傷詠みが現れた。コトビヤ遊びさんが傷詠みに駆け寄ったと思ったらいきなり飛んで抱きついた。

「キジュヨミい！会いたかったレしゅ！」

「イテェ！」と傷詠みの叫び声が病院内に響いた。

「ギョめんなさい：キジュヨミが怪我していたにやんて知らなかったレしゅ…」

傷詠みはふうふう言いながらイスに座った。傷詠みの使っている

病室に今私はいる。

「お前が来るとは思わなかったよマジで。何をしに来た？あ、チカコ。こいつは言葉遊び。俺の知り合いだ」

こんにちわと私は挨拶した。言葉遊びさんもこんにちわと変な喋り方で挨拶を返した。

「キジュヨミは記憶けちゅ落者の治療をしているから私も手伝いに来たレす。何きゃしたいレす。大好きなキジュヨミのためでしゅから」

傷詠みはあとため息をついた。そして傷詠みは適当に歌でも歌ってくれと言った。イタタと呻きながら椅子から立ち上がったのろ病室を出て行った。

「はあい。名前はにゃんていうの？」

「わ、私ですか？私はチカコです」

「じゃあやっぱし：にゃルほど。貴方ぎや傷詠みの――」

「言葉遊び。その先を言ったら絶交だ」

傷詠みは病室の入り口で静かに、でもかなりの圧力をかけた言い方をした。言葉遊びはごめんにゃさいと言ってシュンとした。でも一瞬で立ち直り、部屋を出て行くとする傷詠みの長い髪を束ね始めた。傷詠みがちよんまげヘアーになった。ふふふ。傷詠みって結構かっこいいな。言葉遊びは輪ゴムをどこからか取り出し傷詠みの髪を結わいた。

「：あのな、言葉遊び。俺がどうして前髪を垂らしているか知っているだろう？頼むから止めてくれ」

「キジュヨミはこれが一番似合っていました。辛くても我慢しなしゃい。もともとその髪型だったんだきゃら」

「まったく：。今日だけだからな。俺は見たくないものが見えちゃうんだから：」

見たくないもの？いったい何のことだろう？幽霊？だとしたら面白い。

傷詠みと私と言葉遊びは三人で外庭に出た。そして傷詠みが言葉

遊びにここで歌えば？と言った。言葉遊びは歌を歌い始めた。観客は私と傷詠みと外庭にいる全ての患者。

言葉遊びの歌は独特な歌い方だった。ルトラしか発していないのに何か情景が浮かぶようだった。

観客が集まってくる。病院内のお医者さんたちも、看護師さんたちも集まってきた。

言葉遊びは不思議な声で歌い続ける。

私は熱い何かが頬に零れるのを感じた。手で触ってみるとそれは涙だった。周りの人たちも見てみる。皆泣いている。イメージがまるで頭の中に伝わってくる感じ。頭の中に言葉が浮かぶ。

『元気になあれ』

言葉遊びは数分間歌い、歌い終わるとキレイにお辞儀した。それと同時に観客全員から拍手が送られた。恥ずかしそうに言葉遊びさんはぺこぺこ頭をさげながら傷詠みと私のもとに戻った。

「言葉遊びさん。これって何なんですか？急に涙が零れて…この歌は何なんですか？」

「歌れしゅ。私は歌に能力を添付しゅることが出来るによ」

「能力の添付ですか？　どういうことですか？」

「この話は止め。言葉遊び。チカコには力の話は絶対にしてはいけない。わかったな」

言葉遊びは禁止命令ばかりいとぶーぶー言ったが言われた通りそれ以上何も何かの力について語らなかった。能力。力。いったい何のことだろう？

「俺は部屋に帰る。傷が痛むからな」

「はーい！チキヤコちゃんと遊びに行ってきたいいですかあ？」

「……いいだろう。だが絶対に危険な目にあわせないと約束しろ」

「おーけーレす！絶対に危険な目にあわせないレす！」

傷詠みはそれを聞いて、病院に入ってしまった。

くすくす。言葉遊びがいきなり人を小馬鹿にするに笑い出した。

「許可はとりえました。復讐しにいきましょう。チキヤコちゃん！

キジュヨミに怪我させた奴はどこにいきりゆのですか？」

「え、繁華街にいますか？。復讐ってなんですか？」

「そのまんまでしゅよ。チキヤコちゃん。私をそこまで連れえって行ってくれませんか？」

私は言われるまま言葉遊びをつれて繁華街に向かった。

私は怯えながら繁華街を歩いた。

もしまたスキンヘッドたちを見つけたら言葉遊びさんは何をしてくれるのだ？ 相手はナイフや拳銃を持っている危ない人たちなのに。

スキンヘッドたちに遭遇しないことを祈った。そう考えているとスキンヘッドを一人を見つけてしまった。スキンヘッドの鋭い目線と私の目が合う。やばい。

「あの人がキジュヨミに怪我させた人でしゅか？」

「あの人は多分傷跡みを怪我させた人の仲間です：」

スキンヘッドがニヤニヤしながらこっちに近づいてきた。

「いよう。かわいいお嬢ちゃんにセクシーなお姉さん。こんなところにいると危ないよお？ ちよつと待っててねえ今守ってあげるために仲間読んであげるから」

スキンヘッドは携帯電話を取り出し、喋り始めた。何か暗号のような言葉を使って話している。言葉遊びさんはくすくす笑い始めた。笑いながら携帯電話で喋っているスキンヘッドの耳元に顔を近づける。するとスキンヘッドは一瞬糸が切れた人形のように倒れた。

「な、何をしたんですか？」

「大丈夫です。この人が案内してくれます」

案内？ どこにだ？ そう思っていたらスキンヘッドが立ち上がった。だがさっきの目つきとは違っていた。どこを見ているのかわからないようなトロンとした目つきだった。

「どこに連れて行ってくれるんですか：？」

私は慎重に言葉を選びながら言った。



「もちろんスキンヘッドのアジトレす」

スキンヘッドはふらふらと道を歩き始めた。

日のあたらぬ道を歩いていく。狭い道や荒廃した裏路地を歩いていく。そして、アジトに着いた。アジトはトタンで出来た大きな建物だった。工場見たいな感じだった。中に入るとスキンヘッドたちが十数人いた。

「はげ頭の諸君。私の歌を聴いてくらさい」

そういつて言葉遊びさんは私の手を取って耳に当てさせた。れつたいに聴いてはいけませんと言って。

私は耳に指を突っ込みただスキンヘッドたちからの危害がこつちに来ないことを祈った。

言葉遊びが歌を歌い始めた。

最初はスキンヘッドたちに特に異変はなかった。だが徐々にスキンヘッドが一人、また一人と頭を抱えてもがき始めた。そして倒れていく。

私は変な好奇心で今、言葉遊びの歌っている歌を聴きたくなった。だが、絶対に聞いてはいけないと言われていたので私は我慢した。

そしてそれは正解だった。絶対に聴いてはいけないことが判明する。倒れて悶えていたスキンヘッドたちの目が飛び出始め、舌も伸びきり、失禁してがくがくと痙攣しながら、そして全身の肉という肉がぶよぶよに膨らんでいつて内臓を破裂した。そして言葉遊びが歌を止めて私に近づく。

「復讐はおりやったのれす。帰りりやしょう」

帰り道、チカコは言葉遊びの歌った歌に怯えながら、アジトを地獄のような世界にした言葉遊びに怯えていた。それを感じたのか言葉遊びは唐突に言った。

「私はキジュヨミ以外のために能力を使いまりえん。なりえなら私の能力は絶望を人々にあたえるだけれすかりゃ」

言っていることがわからなかった。でも私は頷いた。わりやったならよろしい。といって言葉遊びは髪をかきあげ笑った。優しい春

風のような表情だった。そして眼が真っ赤だった。傷詠みと一緒に赤い瞳。私は残酷で優しい天使がいたら言葉遊びのことを言うのだろうなと思った。

病院に帰ると傷詠みは言葉遊びを怒った。危険な目にあわせないと約束しただろうと。そして歌ったこと。何故歌ったことを知っているのかと私は訊いたら、傷詠みは俺は傷詠みだからと言った。傷詠みは言葉遊びさんの頭を優しくぽんぽんと叩き、小さな声ありがとう。でもいけないことだ。と言った。傷詠みの目からは涙がこぼれていた。

その夜、言葉遊びさんは病院から出て行った。旅の続きを始めるらしい。最後に私はこんなことを言われた。

「キジュヨミはとても心が弱きゆて泣き虫にゃの。だきやら力になつてあげてね」

## (5) ウサギ病

ある日、病院に一人の女の子が担ぎ込まれてきた。その子はすぐに傷詠みによって診察された。その子はすぐに回復した。

そんなことがあった次の日、私は外庭でのんびり日向ぼっこしていた。そうしていたら傷詠みがその女の子を連れて私に会いに来た。女の子は小学生ぐらいの子で傷詠みにべったりくっついてる。

服装は普通の茶色のセーターで、下は真っ赤なスカート。白のニーソックスを履いた足のきれいな女の子だった。傷詠みは私にこの子と友達になって欲しいと言って来た。

かわいらしい足のきれいな女の子は自己紹介を始めた。

「私の名前はホテルです。ウサギ病の十一歳です！」

「こんにちは。ホテルちゃん。私はチカコ。十六歳だよ」

「ホテルは二年前から黒い季節の影響でウサギ病になった。二年間ウサギ病の闘病生活をしていたのだが、さすがに無理がきたらしい。それでこの病院に昨日運び込まれてきた。まあ何とかなった。俺の

おかげでな」

ククク。と自嘲的な笑いをこぼす傷詠み。ホタルも真似して、ククク。と言った。こちらは可愛らしい。

「ねえ、傷詠み。ウサギ病って何？」

傷詠みがいつものように天井を仰ぎ見る。ホタルもそれを見て真似する。

「ウサギ病は誰かがいないと死んでしまうという病気で精神的な理由から死んでしまうらしい。そうだな……。精神が自殺すると言ったところかな。肉体的な自殺ではなく、精神の方が勝手に自滅に向かってしまう。いわゆる植物状態になる。ホタルは極度の精神衰弱からこの病院に運び込まれた」

「黒い季節関連の病気か……。私と同じね」

「チカコお姉ちゃんもウサギ病なの？」

違う違うと私は手を横に降り、私は記憶欠落者だよと言った。ホタルは知らなくいと言った。確かに小学五年生じゃ知らないのかもしれない。

「今日の夕方までに治療準備を終わらすからそれまで一緒にいてやってくれ」

チカコは素直にわかったと言う。

ホタルは傷詠みから離れて、私にくっついた。腰のあたりを両腕でぐるっと掴んだホタル。傷詠みはそれを見てククク。と再び笑う。ホタルもまたまた真似する。そして傷詠みは病院の中へと戻っていた。

「ねえ、チカコお姉ちゃん。お父さんとお母さんってどんな人？」

「え？ 私のお父さんとお母さん？」

ホタルはうん。と頷く。私は考えた。私の両親。わからない。

「……ごめんね。私、お父さんとお母さんのこと覚えてないの」

「そうなんだ。私のお父さんはこーむいんって仕事してるんだよ！お母さんはずっと家で洗濯とか料理とか作ってるんだ！」

そうなんだ。とわたしは思ってた。私の家族。私には両親と

一人の兄がいた。覚えていないことには未だに何も感じないが、生きていたのなら、会ってみたかった。

傷詠みからはこの世にいないと言われた。その言葉の通り死んでいるのだろうと思った。

ホタルの話を聞きながら私は現実には家族みたいに親しい人考えた。

それは傷詠みだった。私はくすくす笑う。ホタルはどうしたの？と訊いてきた。私は思い出し笑いと言った。

傷詠み、センスの悪い格好に長く赤い髪、真っ赤で全てを見透かすような瞳。皆に優しくて頼りになる傷詠み。

自分は傷詠みのことが好きなんだと思った。嫌だな。でもいい意味の嫌。好きと言っても家族愛のような感じだが。

そしてすぐに夕方になった。

傷詠みが外庭にやって来た。

「ホタル。そろそろ行こうか」

「うん！」

ホタルは私から離れ、傷詠みに抱きついた。くっついてはなれなそうなくらいだ。

私もホタルの治療が気になった。一日しか、ちょっとしか喋っていないと言っても私とホタルは家族の話をした仲だ。短くても親しい仲に違いない。だから私はホタルの治療が終わるまで待ってみようと思った。

傷詠みとホタルが治療室に入っていく。どんな治療だろうか。時間はかなりかかるのだろうか？

そう考えていたら傷詠みとホタルが別々に出てきた。ものの三分程度だった。

「ホタルちゃん。治療すぐ終わってよかったね」

ホタルはうん。と小さな声で頷いた。

「すぐ終わったし、痛くなかったから良かったよ…。でも…」  
なあに。と私は訊いた。

「お姉ちゃん、誰？」

「え？」

「このおねえちゃんはこの病院に入院している人だ。ホタルのことをすっごく心配してくれた人だ。さあホタルちゃん。お母さんとお父さんが待っているよ」

「私のお父さんとお母さんってどんな人？」

「優しくていい人だよ。待合室で待っているから行ってみようか。楽しみだね」

「うん！楽しみ！」

傷詠みはそう言ってホタルを連れて待合室に向かった。二人の歩く姿を見て私は呆然とした。ホタルが傷詠みと離れて歩いている…。

数分間私は葉呆氣に取られ、立ち尽くしていた。そして傷詠みが帰ってくる。

「……いったいどういうことなの？」

「ウサギ病は治療できない病気なんだよ」

「でも、治療は終わったんでしょ……？」

「一応な。全てを犠牲にしてだが」

「どういうこと……？」

「ホタルが選択したんだよ。お父さんとお母さんを悲しませるくらいなら私は消えたほうがいいって」

「それで何をしたのよ……？」

「記憶を全部消した」

「そんなのって……そんなのって……酷すぎる……！」

「決意を無駄にするわけにはいかない。それが俺の仕事だ。黒い季節に関連する病気は俺以外の人間に対処できない」

ぽたっと何かが病院の床に落ちた。光の粒みたいのが。私は落ちた物を見た。小さな水玉が二つ三つと出来ていた。私は傷詠みの前髪を無理やりかきあげて眼を見た。

「……なに泣いてるのよ。傷詠み」

泣いてなんかいないさ……。傷詠みが呟く。

「泣いているじゃない！傷詠みはなんで自分が泣くぐらい哀しいことを背負うのよ！」

「何も背負っちゃいないさ。俺は傷詠みだ。ただ治療するだけ。俺は医療機器と同じ」

そう言って踵を返す傷詠み。私は傷詠みの手を掴んで止める。

「白衣がシワくちやになるから止めてくれ」

「ねえ、傷詠み。私のお父さんとお母さんとお兄ちゃんの記憶。消してないよね……！」

黙り込む傷詠み。

「もしかして、消したの……？」

「消すわけがないだろう。最初から覚えていないのだから」

そう言って乱暴に傷詠みが手を払った。

「なにが哀しくてちーちゃんの記憶を消すって言うんだ！俺がそんなことができるわけないだろうが！」

傷詠みはぐすぐす泣きながら廊下を進んでいった。

ちーちゃんって誰よ……？

(6) 病院の炎上と魔眼持ちの戦い。

私は気がつくと病院の外庭にいたことがわかった。それも夜。病院が赤い。

「何で外庭にいるんだろう？寒っ！」

私は周りを見渡した。周りには他の患者達が沢山いた。皆ぼーっと口を開けながらある方向を向いていた。

私もぼーっとその方向を向いた見た。ちょっと待て。私は病院のある方をもう一度見た。

「病院が……」

病院が炎に包まれていた。

「チカコ。起きたか」

傷詠みが病院の方から人を抱えて歩いてきた。

「これで最後の一人っ」と

「誰がこんなことを！」

「悪いな。俺のせいだ」

「傷詠みのせい？ どういうこと？」

「ちよっと野暮用を片付けてくる」

そう言って傷詠みは燃え盛る病院の方へと向かっていった。その先には何もない。いや、誰かいる。炎の光が逆光となり顔は見えなかったが遠い向こう側に赤色の皮のジャケットに緑色の返り血を浴びたみたいな感じの服を着た一人の人が立っている。髪の毛は傷詠みと同じく赤い。モミアゲから顎に向かって生えるヒゲまでも赤い。その人に向かって傷詠みは歩いていったのか？ 立っていた人も傷詠みに向かって歩き始めた。その人が傷詠みに近づく。そして傷詠みに対して大きな声で、変なしゃべり方で話始めた。

「傷詠みくくん。王様はお前を消すことにしたのよくん」

傷詠みの知り合い？ 王様？ 奇抜な格好の男はそう言った。

「……イジリ魔か。百十数年ぶりだな。まだ世界の涙の下にいたのか」

「そんなことはどうでもいいのよくん。君の能力じゃ僕に勝てないの。僕的能力は記憶の書き換え。縛りはあるけど君を倒すには十分な力だよん」

何を話しているのかまったくわからない。聞こえないわけではない。言っている意味が理解できないのだ。

周りの患者達十がいきなり立ち上がった。イジリ魔と傷詠みに呼ばれた男は続けて喋り始めた。

「本当は君にベツタリしている女の子を使いたかったんだけどさあ。傷詠みくんが一番先に助けた人間だから近づけなかったのよん。今から書き換えやってもいいんだけど距離が離れすぎて出来ないのよくん。だから人質にするのよーん！」

立ち上がった患者達が私の周りに集まってきた。どういうことだ？

「傷詠みくんの能力の再現は一日三回か四回ぐらいしか使えない。もうひとつの能力の再生に使用回数縛りはないけど彼女の周りにいる人間、つまりは僕の操り人形の記憶を全て「再生」するとすると体力が持たないはずよん。疲れきったところで僕がトドメを刺してあげるのん！」

傷詠みは突然走ってこっちに向かってきた。と、同時にイジリ魔と呼ばれた人が変な声ですた〜と。言い放った。その瞬間周りに群がっていた患者達がいきなり私の手や足を掴んできた。

「ちょ、ちよっと！何よ！」

まったくわけがわからない。なんでみんな私を捕まえようとするのよ！私は手足をバタバタさせたがまったく通用しなかった。異常なぐらい手足を掴む力が強い。

傷詠み画私の手や足を掴んでいる患者達を投げ飛ばし始めた。

「傷詠み！いったいどういうことなの！」

「イジリ魔が操っている人間だ。今はお前の知っている人ではない」  
傷詠みはそう言い放つと私を背に立った。殺す気だ。

「この人たちを殺さないで！」

傷詠みの動きが止まった。振り返らず傷詠みは言った。

「どうしろというんだ？」

「再生って力で助けてあげて」

私はさっきの話を聞いていた。話によると再生という力を傷詠みは持っているらしい。

その力を使えば操られた人たちは元に戻る、らしい。数秒の沈黙。  
傷詠みは首を横に振った。そんな……この人たちを殺すの？操られているだけなの！

「しょうがないな……まったくチカコには敵わないよ……」

傷詠みはやれやれと呟き、前髪をかきあげた。真紅の眼があらわになる。首を横に振ったのは拒否を意味することではなかった。

傷詠みは瞬時に操り人形となった患者達を再生させた。痙攣と共に獣のような表情から安らかな顔つきになって倒れた。



「記憶の書き換えを解除……。チカコ……。これでどうだ……。？」

傷詠みの息が荒い。やはりイジリ魔が言った通り体力の消耗が激しいみたいだ。私は立ち上がって傷詠みのもとへと向かおうと思った。が、傷詠みは制す。

「まだ終わっていない……」

イジリ魔が近づいてくる。トドメを刺しに来たのだ。近づいてくるイジリ魔。顔がめっちゃくちゃに見えるほど歪み狂った笑み。そしてイジリ魔の瞳も真っ赤な眼だった。

「王様の次に強い傷詠みく〜んを殺したら僕は王様の次に強い魔眼持ちだという証明になるよん！」

手にはナイフ。いや、ナイフというには大きすぎる刃物。あれで斬られたらいくら傷詠みでも……

「傷詠みく〜ん。君を殺し終わったら書き換えの解除された人間を再び書き換えて獣にして君の彼女を全員でレイプしてあげる！そして絶望の中で削るように殺してあげるよ〜ん！どう？最高じゃない？いや、もっと面白いことを考えつくいた！君の彼女を僕の彼女にしてあげるよ〜ん！」

「イジリ魔。お前に俺が殺せると思っているのか？」

息の荒い傷詠み。イジリ魔の表情という表情が消えた。

「それは虚勢。どれも虚勢。そして虚勢。魔眼の能力は魔眼持ちには通用しない」

イジリ魔の顔に再び壊れた笑みが貼り付けられる。

「だ〜からいい加減諦めなよ〜ん。君の彼女は僕が幸せにしてあげるから！」

ククク。傷詠みのいつもの自嘲的な笑いが。何故笑ってられるの？わからない。魔眼が何かはまりわからないけど、イジリ魔には再現とか再生とか言う力は使えないのに！それでも傷詠みは笑いを止めない。笑いながら静かに嬉しそうに言葉を紡ぎ始めた。

「お前の頭に入っている私の情報は化石になっているようだ。ククク。最後に会った時のままの俺だと思うなよ？再現。再生。二つだ

けではないよ。三つあるんだよ。私の能力は」

イジリ魔も笑いながら聞いている。

「対象の記憶を破壊して再起不能、無力化させる再現。これは初代傷詠みの能力。記憶欠落または記憶の書き換えを元に戻す再生。これは二代目傷詠みの能力。この二つの能力は前傷詠みから受け継いだ能力。王の次に強い魔眼持ちと呼ばれている所以を教えてやろう」

「それはなんだ？」

気がつくといジリ魔はまた無表情になっていた。

「傷詠みは代を重ねるごとにどんどん能力を増やしていくのだよ。では問題だ。三代目の能力は何だと思う。イジリ魔。君の考えを聞かせてくれ」

イジリ魔は数秒黙った。そして言葉を紡ぎだす。

「…難しい問題。わかるわけがない。だが、この状況も覆せる能力なのだろう？」

「ククク。そうだチカコの考えを聞いてみよう。チカコはどんな能力だと思う？」

「え？私の考え？」

いきなりの質問に私は頭が真っ白になった。この状況で私に意見を訊くのか？

傷詠みの第三の能力。それは、今の状況も覆せる能力。鍵となるのは魔眼の能力は魔眼持ちには通用しないということ。イジリ魔は魔眼持ち。つまり、魔眼持ちであるイジリ魔にも通用する能力。

「それは魔眼持ちに通用する能力…？」

クククと自嘲的な笑い。無表情のイジリ魔の顔が醜く歪んだ。笑っている。

「それが答えなの？ありえないよーん。それじゃ王様と同等の魔眼持ちってことになるもーん」

イジリ魔の表情がまた無表情に戻る。

「それが答えか？傷詠みくん」

傷詠みの笑い声がどんどん大きくなる。夜の燃える病院に、外庭

に自嘲的な笑いが響き渡った。瞬時に笑いを止めてイジリ魔の方へ顔を向けた傷詠み。

「イジリ魔、これが答えだ」

傷詠みがそう言い放った瞬間、イジリ魔の表情が固まった。凍りついた。

「：どういことだ？眼が：。眼が：」

イジリ魔の眼がどうしたのだ？ 私はイジリ魔の真っ赤な瞳を見た。違う。真っ赤どころじゃない。眼から眩しいほどの強烈な光が漏れ出している。

「眼が：！ 眼が！ 見えない！ 熱い！ 痛い！ 何をした！ 傷詠み！」

「俺の能力。それは魔眼の能力を暴走させる力。暴走して自らの魔眼の力で、そうだな。お前だったら記憶の書き換えを自ら味わうことになる。痛いだろう？辛いだろう？そのまま記憶が崩壊していくのを自ら体験するがいい」

イジリ魔の表情が狂い始めた。奇妙な笑顔をしたかと思うとこの世に絶望しましたみたいな泣顔になる。

「あ、あ、ああ、あああ。ああ？ああ！あああゝああ。あ？」

顔面の筋肉が全て弛緩したかのごとくのっぺらぼうみたいな表情になった。倒れた。痙攣し始めている。止まった。

「これが俺の力。魔眼殺しだ：」

傷詠みはそう言って崩れるように倒れた。私はすぐさま抱きかかえる。思ったより傷詠みは軽かった。

「傷詠み！」

「大丈夫だ：少し眠らせてくれ：」

そう言って傷詠みは眼を閉じた。閉じる瞬間、頬に涙がつつたっていった。

(7) 旅のはじまり。

私と傷詠みは病院から出た。火事が起きた日から三日が過ぎていた。三日間傷詠みは昏睡状態だった。四日目、つまり今日。突然傷詠みは昏睡状態から回復した。

火事が起きた病院のことだが、入院していた記憶欠落者患者達は他の病院に臨時的に移った。

ふらふらの傷詠みと私は知らない昼間の街を歩いていた。

「ねえ、傷詠み。少し休まない？」

「そうだな」

私は周りを見渡し、何か休めそうなお店を探した。あった。寂れた喫茶店。私は傷詠み愛用の白黒ボーダーロングジャケットの裾を掴んで喫茶店を指差した。

傷詠みはそれを見ていった。

「確かに休めそうだな。入るか」

私と傷詠みはその喫茶店に入っていた。店内はとても静かだった。カチャカチャと食器を洗う音以外何も聞こえなかった。客も私と傷詠みだけだった。

私と傷詠みはアイスコーヒーを頼んだ。数分後、注文したアイスコーヒーが来た。

「ねえ傷詠み……」

「何だ？」

「魔眼持ちって何なの？」

私は意を決して火事の起きた日のことを訊いた。

「知らない」

「知らないわけないでしょ。イジリ魔とあんなに話してたじゃない

……」

「知らない」

傷詠みは知らないとしか言わなかった。それから私と傷詠みはアイスコーヒーを飲み終わった。

「本当に知らないの……？」

「……」

傷詠みはやれやれと呟いて首を振った。

「わかったよ。チカコ。君の願いを聞かないわけにはいかないから……。質問してくれ。質問してくれたら何でも知っていることなら教えてあげよう」

「魔眼持ちって何？」

「魔眼持ちって言うのは突然変異した人間のことだ。魔眼って言うのはその名の通り魔を宿す眼のことで、その眼には不思議な力がある。たとえば俺の力だと眼が合ったものの記憶を破壊する再現。その記憶を元に戻せる再生。そして最後に魔眼の力を暴走させて自滅させる能力、魔眼殺し」

傷詠みが遠い眼をした。きっと色々な過去があるのだろう。

「王様って誰？」

「王様って言うのは世界の涙のことだ。世界の涙は世界で最初の魔眼持ち。どういう出生をしたのかは知らない。涙によって俺は魔眼持ちになった。涙は人格転移という能力を持っていて、記憶を対象の人間に植え付けることができる。自分の複製を作れるわけだ。だが完全じゃない。複製した後にはさっきまで使っていた肉体の精神は記憶欠落者になってしまう」

「涙によって魔眼持ちになったってことは傷詠みも人格転移されたの？」

「そうだ。初代傷詠みになった者がな。人格転移された後の残りカスとなった人間が何かの因果で魔眼持ちになれる」

初代。そういえば今の傷詠みは三代目って言ってた。ということだ？

「初代って傷詠みなんでしょ？今の傷詠みは何なの？」

自分で言っている意味がわからない。どういふことなんだ？ わからない。

「言いたいことはわかる。何故俺が三代目になれたかということだろう？」

「よくわからないけどそういうことかな？」

クククと自嘲気味に傷詠みが笑った。

「魔眼持ちは、というか傷詠みはだが魔眼の能力を伝承させることができる。一代目は再現を生み出して二代目に傷詠みの魔眼を伝承した。二代目は再生を生み出して俺に魔眼を伝承した。そして今の俺がいる。イジリ魔もあれば五代目だ。殺したからもう二度と会うことはないとおもうが、イジリ魔の魔眼と同じ能力を持つ魔眼持ちはまた生まれるだろうがな」

またひとつ疑問が浮上した。傷詠みはいったい何歳なの？

「傷詠み。イジリ魔に最後に会ったのって百五十年前なんでしょ？傷詠みって何歳なの？」

「ククク。通算すると千年近い。自分が何歳かなんてもう忘れた」  
千年……。平安京から鎌倉幕府ぐらい昔の話だ。信じられない。

「信じなくてもいいさ。全部嘘だからな」

「え？全部嘘なの？」

クククと嬉しそうに笑う傷詠み。騙した！ひどい！

「じゃあ傷詠みは何のために生きているのよ！」

「世界の涙を殺すためにな」

「どうせそれも嘘なんですよ！」

「これは本当だ。俺の命に誓う」

嘘だか本当だかわからない。確かに人間は何がどう転んでも千年も生きられない。そんな壮大な人生なんか送れない。千年も生きていたら気が狂うに違いない。

「ねえ、傷詠み」

「なんだ？」

「これから私は何をすればいい？」

クククとまた笑う傷詠み。

「十六歳だろう？ 高校生にでもなれ」

「高校生に…？ 普通の生活に戻れるかな…？」

「なれるさ。チカコは何も知らない。大丈夫だ」

「傷詠み。私、普通の生活なんていらないよ」

傷詠みが喫茶店に入ってから初めて私の方へ顔を向けた。

「どういう意味だ？」

「私は決心しました。私は傷詠みのそばから離れない」

「馬鹿なことをぬかすな」

「傷詠み。私も世界の涙を探す旅に連れてって」

しかし傷詠みは頷かない。

「何で駄目なの？」

「俺の邪魔になる」

「邪魔にならないから」

「イジリ魔の時は奇跡的だった。だが代償も払ったんだ。切り札の魔眼殺しが涙に知られてしまった。涙は絶対に俺の前に姿を現さないだろう。イジリ魔みたいな使い捨ての魔眼持ちが腐るほど集まってくるがな。そんな状況になってみる。俺は今度こそ勝てない」

「じゃあ私も魔眼持ちになる…」。だから…」

痛い。傷詠みが私の頬を平手打ちした。

「ふざけたことをぬかすな！ 軽々しく魔眼持ちになろうなんて思うな！」

初めて傷詠みが怒った。

「だって…私は…傷詠みのそばにずっといたいんだもん…」

「それは無理だ！ だから…」。頼むからそんな眼で見ないでくれ…。止めてくれ…。頼むから…」

傷詠みは両手で頭を抱え始めた。私は負けない。絶対に傷詠みについていく。絶対に絶対に。

「本当にいいのか…？」

「本当にいいの」

「もう普通の生活に戻れないぞ……?」

「戻れなくてもいい。傷詠みと一緒にいられるのなら」

傷詠みは黙り込んだ。沈黙。長い長い時間がたったような気がした。実際長い時間私と傷詠みは黙り込んでいたのかもしれない。カチャカチャと食器を洗っている音が聞こえる。

「わかった。魔眼の伝承をしよう。場所を変えるぞ」

そう言って傷詠みは席を立ち店を出た。私もそれについて行く。無言で歩いていく傷詠み。どこか話し難い雰囲気が出ていた。ただ私はついて行った。

そして誰もいない夜の公園に着いた。

外灯とブランコ、滑り台にベンチ。特徴のないどこにでもあるような公園だった。

「適当にどっかに座ってくれ。すぐ終わる」

私は言われた通り座る場所を探した。一番近くにあったブランコに座る私。

「痛くないから安心しろ」

傷詠みは髪をかきあげて真っ赤な瞳をさらした。そして私の頭をそっと掴んで言った。

「俺の目を見て」

最初に会った時に言われた台詞。

私は傷詠みの眼を見た。深く鮮やかな真紅。ぼわんと不思議な感覚。身体が宙に浮かんたような感じがした。傷詠みが瞳を閉じた。その瞬間、様々な映像が映画を高速再生したかのごとく見えた。

小さな女の子。それは妹。自分以外の親族が記憶欠落者となった時。それは黒い季節。真っ赤な髪と眼を持つ男との出会い。それは二代目傷詠み。伝承したことにより死んだ魔眼持ち。それは二代目傷詠み。かわいい妹。それは小さな病院にいた。スキンヘッドの男達。そして再現の使用。真っ赤な病院。イジリ魔との二度目の戦い。そして最後の場面になる。喫茶店。さっきの会話。伝承する。死。



死。真っ暗。

「伝承は終わった。チカコは四代目傷詠みとなった」

「…この流れ込んできた物は何？」

「俺の記憶だ…」

そして知った。まだ完全ではないが、傷詠みの記憶から察するに…。

「傷詠み！ どうしてこんなことを！」

ほかの魔眼持ちはどうか知らないが傷詠みは人から人へ記憶を「転移」させて生き続ける。世界の涙のように。だが世界の涙のように相手の記憶を塗りつぶして転移することはできない。

傷詠みは相手の記憶に傷詠みの記憶をプラスさせる。そして伝承を終えた傷詠みは精神崩壊を起こして死んでしまうということだった。

「チカコの中で俺は生き続ける。これで俺はチカコと共に旅をすることが出来る」

「キョウスケ！」

チカコは傷詠みの名を呼んだ。傷詠みの過去を知ったのでわかった。そして私の覚えていない記憶を補完したことによって知った事実に泣きそうになる。

「懐かしい響きだ。俺はキョウスケだった」

傷詠みの頬に涙がったう。

「チカコ。君にはとてもつらい経験をさせることになる。でも負けるな。それが君の選んだ道だ」

傷詠み目をつぶる。私は叫んだ。傷詠みの名を叫んだ。

「いつかまた会おう。俺のかわいいいちーちゃん。俺のかわいい妹よ…」

傷詠みは笑った。瞳から光が失せていた。そして力なく崩れた。

## エピソード

チカコは傷詠みの過去について思う。傷詠み伝承をした時に座った特徴のない公園のブランコに座っている。

あれから数十年経った。傷詠みになった時からチカコの身体の成長はストップしている。傷詠みが愛用していた黒白のボーダーラインのロングジャケット。中には同じく白黒のロングTシャツ。そして白黒モザイクのパンツ。

傷詠みになってわかったことが一つあった。傷詠みが何故泣き虫だったかが。チカコはブランコから立ち上がる。空に手を伸ばす。太陽が眩しい。手のひらで太陽を隠してみる。

魔眼は人の心の隠された記憶を照らしてしまう。心の傷を詠んでしまう。傷詠みは何故世界の涙を殺さなくてはいけないと思ったのかかわかるようになっていた。

人には忘れたい過去がある。それをえぐって広げて暴く行為がどれだけ罪なことか。それを見たくなくても見てしまう自分が許せなかったのだ。

チカコは髪で魔眼を隠した。

「キョウスケお兄ちゃん……私、全てを終わらせてみせるから……」

チカコは傷詠みの名前と誓いを呟いてブランコから立ち上がった。そして公園から消えた。

終

**(後書き)**

いかかでしたでしょうか？  
もしよろしければ、感想の方を書いていただけると幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0654p/>

---

傷詠み 黒い季節から二年後

2010年11月22日13時10分発行